

その時 III

これにはお前の骨が入つてゐるのだ  
てのひらにかくれさうな白い壺  
かはいい壺  
こんな夜ふけになつてから一つの壺をとり出す  
窓のすき間から  
さつきから 時々 花のやうに  
雪が舞い込んでゐる  
外ではそいつがさらさらと音たててゐる  
明るい電気に照らされたせまい室で  
僕はこたつにあたりながら  
蓋を取る  
僕はふと耳をすます  
銘仙のこたつ布団の模様の上に  
白い粉が散る  
僕は人間の骨といふものに見入る  
太つたお前を支へてゐた  
脆い少し黒ずんだ灰を  
指でつまんでみたりして  
僕に感傷の心が湧く  
一冊のすぐれた詩集を閉ぢるやうに  
かはいい壺に蓋をする  
それを読み終つたかのやうに  
僕はためいきをつく  
がうがうと音たてて  
ああ 吹雪